

令和 元年 5 月 29 日現在

機関番号：32503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16822

研究課題名（和文）フランス語の知覚動詞に関する凝結表現の研究

研究課題名（英文）A study of frozen expressions on perceptual verbs in French

研究代表者

木島 愛 (KIJIMA, Ai)

千葉工業大学・社会システム科学部・准教授

研究者番号：40767563

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000 円

研究成果の概要（和文）：凝結表現（固定表現、慣用句）は、表現を構成する各要素の意味の総和からは予測ができない意味を生じさせる表現であり、「凝結」という現象は、実際には文法化されている場合が多く、意味論だけではなく、統辞論や語用論の分野にも密接に関わっている。本研究では、視覚を表す動詞を含む凝結表現に焦点をあてた。それはフランス語と日本語の知覚動詞の中でも使用頻度が高く、知覚の中でも特に視覚は、関連する語彙が多いからである。フランス語と日本語の視覚を表す凝結表現に関して、現在両国で行われている凝結表現に関する研究をまとめ、辞書記述と実際の例文から、使用語句の差を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、従来例外とされきたフランス語の凝結表現を中心に据え、辞書の記載と実例を動詞の統辞的意味的側面から比較分析したことである。社会的にも、使用頻度を明らかにしたことで、学習者が使用頻度の高い順に効率よく学習する手助けとなる。

第二に、語彙文法理論の「凝結」という概念を用いたことである。名称や定義によって、同一に扱われることのなかった動詞句、動詞的コロケーション、比較を使用する動詞的構造、動詞と副詞句による慣用表現などが全て研究対象となるからである。類似表現であっても、「凝結度」を分析概念として導入したことで、より緻密な記述が可能となった。

研究成果の概要（英文）：Frozen expressions (also known as idioms) are a fundamental aspect of language and remain the best evidence for language variety. The meanings of frozen expressions are not compositional and are usually subject to grammaticalization, as well as the rules of syntax, semantics, and pragmatics.

This research concerned the frozen expressions with visual perception verbs in French and Japanese. Among perception verbs, visual verbs are used more frequently and there are variety of words or expressions related to visual perception in both French and Japanese. I surveyed and summarized previous studies in French and Japanese about frozen expressions with visual perception verbs and clarified the differences in the words and phrases used for the expression collected from dictionaries and attested data.

研究分野：仏語学

キーワード：凝結表現 知覚動詞 日仏対照 語彙文法

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) フランス語の知覚動詞に関する研究では、凝結表現は例外として分析の対象外とされてきた。小熊 (1999) が動詞 *regarder* を用いる *ça ne me regarde pas* という表現を分析しているが、*regarder* が視覚を表さない場合の例として取り上げるに留まっている。*voir* の凝結表現では、Franckel et Lebaud (1990) が *regarder* や *entendre* と比較するために、いくつかの表現を扱っているが、凝結表現としての分析は行われていない。

(2) 辞書などで「熟語表現」もしくは「慣用表現」として見出しが立てられている表現は、参照する辞書によって記載されている表現は異なっており、言語学の分野では、定表現、固定表現、慣用表現、特有語法、合成語、記号素複合、連辞素と呼ばれ、それぞれ定義も異なっているという問題があった。そこで、Gross (1996) が提唱する「語彙文法理論 (lexique grammairial)」を使用して、「慣用表現」の分析を行うことにした。「語彙文法理論」を選択した理由は、「凝結 (figement)」という概念を提起しており、言語学の分野で名称や定義の異なる現象を全て含む概念であること、他の言語や情報工学などの他の分野への応用を視野に入れた発展性が認められる理論だからである。

(3) 日本国内におけるフランス語の「凝結」を扱った先行研究としては、名詞句を中心としたものが多く、動詞に関するものはない。これらの問題を解決するため、語彙文法理論を用いた分析を開始した。仏和辞典と仏仏辞典に記載されている視覚を表す動詞 (*voir* : みる) の慣用表現から、いくつかの表現の分析に着手したが、辞書に記載されている「慣用表現」には、辞書によって記述方法にかなりの差が見られること、複数の使用例が記載されていても、用法の差異は記されていないことなどから、辞書表記に関する問題点を指摘するに至った。

2. 研究の目的

動詞に関する凝結表現の詳細な研究が必要であることから、凝結表現のデータベース構築と、個別の凝結現象を分析し、今まで指摘されることのなかった動詞の凝結表現に関する詳細な記述を目的とした。

(1) 知覚動詞に関する凝結表現の網羅的データベース構築：仏和・仏仏辞典、文法書に記載のある凝結表現を全て抽出し、各表現に対し、対応する日本語訳、形態素構造、意味構造などを詳細にリスト化する。

(2) 辞書記載とコーパスにおける実例の比較分析：コーパスにおける凝結表現を全て抽出し、語彙文法理論に沿って、凝結度を解明する。

3. 研究の方法

(1) 辞書記述の相違点のまとめ：仏和辞典と仏仏辞典では表記方法、記載している凝結表現に差があるため、個別に集計した。

(2) 実例と凝結表現の比較分析：20 世紀以降を小説をコーパスとし、使用例を全て抽出し、辞書記述と比較した。統辞構造と意味構造から、相違点を追求した。

(3) 日本語の視覚を表す慣用表現との比較：フランス語と同様に、辞書記述を分類し、実例の観察、フランス語との比較を行った。

4. 研究成果

(1) 仏和辞書と仏仏辞書、計 19 冊から、動詞 *voir* が凝結表現（慣用表現）として使用されている場合を全て抽出し、その記述分類を行った。

(2) *voir* の凝結表現の中でも、特に辞書ごと表記の違いが多い表現 *X n'avoir rien à voir avec / dans Y* を分析した。辞書記述では *voir* に後続する前置詞として *avec* と *dans* があるが、この両者の差は記述されていない。それぞれの凝結度を計る変形操作を行い、前置詞 *dans* と *avec* の差は、その変形特徴からも統辞的にはさほどない。しかし、コーパスにおける実例の観察から、*avec* を用いる場合には、*X* と *Y* の範列はとても開かれており、様々なものが *X* と *Y* になりえる。一方、*dans* が用いられる場合、*X* の範列には人や事物などが含まれるが、*Y* は *X* を含有する事柄に限られ、*avec* に後続する *Y* よりも範列は閉塞的であることを指摘した。また、*rien* の類義語の範列として *pas grand-chose*, *plus grand-chose*, *que peu* による置換可能性を示し、*rien* とより等価的振る舞いをするのは、*pas grand-chose* であり、*plus grand-chose* と *que peu* の場合には、*X* と *avec Y* は必要な要素となることを明らかにした。

(3) *voir* と同様に視覚を表すフランス語の典型的な動詞 *regarder* の凝結表現を考察した。*Regarder* は *voir* より使用頻度が低く、辞書に記載されている凝結表現も少ない。しかし、コーパスにおける実例を観察すると、辞書に記載されている例と統辞的にも意味的にも似た表現が

数多く見つかることから、regarder が $N_0 + \text{regarder} + N_1$ という統辞構造に限定し、この構造に多く見られる修飾表現が ①副詞、②Avec N、③d'un air + Adj. という 3 タイプであることを使用分布から限定した。また、これら 3 つのタイプは置換可能である場合があり、その条件を特定した。① 副詞と③ d'un air + Adj. は同じような性質として使用される場合が多いが、副詞が修飾する際の特性により、avec N という名詞を用いた修飾表現とのみ等価となる場合もあることを示した。また、辞書における記載などは一切ないが、実例観察から、形容詞だけの使用が可能であることを、①～③の修飾語句と置換可能であることを示した。

(4) 凝結表現の分析に関して、Gaston Gross が提唱する語彙文法理論を分析基準として使用しているが、語彙文法を提唱しているパリ 13 大学の LIPN 研究所（パリ北情報工学研究所）との情報交換の過程において、日本語との対照研究の必要性に思い至った。日本語との対照分析という点では、英語や中国語、韓国語、ドイツ語、ロシア語に比べ、フランス語との凝結表現に関する日仏対照研究は行われておらず、分析基準も定まっていないことから、その重要性は明らかであった。分析対象をより広げるために、フランスと日本における凝結表現（日本では慣用句およびコロケーションと呼ばれるのが一般的）の研究状況を調査した。特に、辞書におけるフランス語の記述がそうであったように、フランス語母語話者向けの日本語の辞書の慣用表現の記述は現在の使用が観察されないものや、必要であろう表現の記述がほとんどない場合が多いという現状を示していた。日仏対照研究の第一歩として、現在まで行った視覚動詞の分析を中心に据え、視覚を表す凝結表現に関する調査を行い、[表 1] のような結果が得られた。

	フランス語		日本語	
動詞	voir	77	見る	109
	regarder	30	見える	5
名詞	œil/yeux	50	目	131
			眼	15
			片目	2
			瞳	2
	vue	5	(視覚, 眼差し)	
	myope	1	近視	1
	aveugle	2	盲 (めくら)	19
	regard	27	視線	1

[表 1: フランス語と日本語の視覚を表す凝結表現の種類]

日本語とフランス語に共通する分析基準として、語彙文法理論を軸とした分析基準の構築を試みる必要があり、石田 (2015) などを参考に、日本語の動詞的慣用句の分析基準などを考慮しながら、語彙文法理論の有効性を検証した。

<引用文献>

- ① FRANCKEL Jean-Jacques et LEBAUD Daniel, *Les figures du sujet, A propos des verbes de perception, sentiment, connaissance*, Ophrys, 1990.
- ② GROSS Gaston, *Les expressions figées en français*, Paris, Ophrys, 1996.
- ③ 石田プリシラ, 言語学から見た日本語と英語の慣用句, 開拓社, 2015.
- ④ 小熊和郎, <意思性>とは何か - 日仏の知覚動詞を例に, 西南学院大学フランス語フランス文学論集, 第 30 号, 1996, pp.131-172.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① Grezka Aude et Kijima Ai, L'expression de la perception visuelle : regard franco-japonais, Lexis, 査読有, 13, 2019, <https://journals.openedition.org/lexis/>
- ② Grezka Aude, 高田 晴男, 木島 愛, パリ 13 大学 Aude Grezka 氏講演の記録, 言語の普遍性と個別性, 9 巻, 2018, 71-94
- ③ 木島 愛, フランス語の動詞 regarder に関する一考察 - 共起しやすい副詞表現 -, 諸言語における TAME の発現について, 査読有, 2018, 1-22
- ④ Kijima Ai, Contraintes syntaxiques et sémantiques sur la construction infinitive du verbe voir, 新潟大学言語文化研究, 21 号, 2016, 23-39
- ⑤ 木島 愛, 凝結表現 n'avoir rien à voir に関する考察, パロールの言語学・フランス語学研究, 査読有, 50 号別冊, 2016, 51-71

[学会発表] (計 4 件)

- ① 木島 愛, 動詞 regarder と共起する副詞表現について, 日本フランス語学会第 312 回例会, 2017
- ② Kijima Ai et Grezka Aude, Le figement des verbes de perception visuelle en français et en japonais,

文法化，語彙化，凝結：日仏対照言語学的アプローチ，2017

- ③ Grezka Aude et Kijima Ai, L'expression de la perception visuelle : regard franco-japonais, La Perception en Langue et en Discours 3, 2018
- ④ Grezka Aude et Kijima Ai, La problematique du figement en français et en japonais, I Congreso Internacional de Fraseologia y Traducción en Hispanoamerica, 2018

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。